ISSN 0289-9191

台湾情報誌

交流

2015年7月 vol.892
公益財団法人 交流協会
Interchange Association,Japan

『失憶中　玩笑篇。』
台湾ツアーの記録

交流

2015年7月
vol. 892

目次 CONTENTS

『失憶中　玩笑篇。』台湾ツアーの記録 …… 1
（佐々木透）

日台ビジネスアライアンスによる中国展開事例を探る―２
―杭州友佳精密機械有限公司を訪問して― ……10
（藤原 弘、根橋玲子）

【台湾内政をめぐる動向（2015年５月上旬～６月上旬）】
国民党の総統候補党内予備選の実施、蔡英文民進党主席の訪米 …18
（石原忠浩）

コラム

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。
※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。
万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

交流協会について

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972 年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。
東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

『失憶中　玩笑篇。』台湾ツアーの記録

リクウズルーム主宰・劇作家・演出家　佐々木透

交流協会では、日台交流に有意義な催しに後援名義を付与する形で協力しています。台湾でも日本のダンス・演劇等が盛んに上演されて好評を得ておりますが、ここでは、日本と台湾双方が表現の融合により生みだされた、コンテンポラリーダンスをご紹介致します。言葉に依らない身体表現を使ったパフォーマンスは、日台双方のパフォーマーと観衆にもアピールするところが大きく、大成功でした。

2015年6月1日早朝。昨年に引き続き、世紀當代舞團（Century Contemporary Dance Company 以降：CCDC）との共同創作のために成田を発つ。昨年もほぼ同時期にCCDCのスタジオ（台北市）で滞在創作を行っている。機内の窓から、本年度に至るまでの経緯を少し思い出しながら、眼下に広がる雲海を眺めた。

○本公演に至る経緯

―台湾との出会い

昨年より引き続き――――――　というのは厳密ではなく、事の始まりは、そのさらに一年前の「アジア舞台芸術祭2013」まで溯らなくてはならない。この芸術祭は、東京都等の主催により13年前より東京芸術劇場で開催されているもので、毎年アジアの各都市から招聘されたアーティストが、プロデューサーの宮城聰氏（SPAC―静岡県舞台芸術センター ―芸術総監督）の決めたテーマを元に、短い創作期間を経て、15分の小作品を発表するというものである。私は東京のアーティストの一人として採択をいただき、CCDCのダンサー、リ・フェイウェン（李蕙雯）と共同創作の小作品を発表した。

芸術祭も終わり年が明けた頃、CCDCより連絡が入った。内容は、「アジア舞台芸術祭2013で上演した、CCDCのチェン・ウェイニン（陳維寧）の小作品『イリュージョン』を、あなたの手で新しくテキストを書き下ろして欲しい。それを2014年の夏に台湾で上演したい」というものだった。最初はよく分からず戸惑いながらも、密かな胸の高鳴りを禁じ得なかった。ダンスカンパニーにテキストを書くということの知的興味は、私を大きく突き動かし、このことはその後、台湾と日本について考えていく大きな契機になった。

―2014年、初の共同創作 ～ダンスと演劇を、いかにコラボレーションさせるか～

こうして私は2014年6月に台北市のCCDCスタジオに滞在、チェン氏と共同演出で『イリュージョン～記憶喪失で鈍痛中のテンプル～』の創作に取り組んだ。

創作の手順は、私がテキストを書き下ろす→それをチェン氏が構成する→互いの担当パート、私なら演劇パート、チェン氏ならダンスパートの振付なり、演出を行っていく、という形である。

基本的には彼女の世界観による作品なので、彼女のイメージに寄り添いながらも、コンテンポラリーダンス特有の時間の流れが感じられにくい局面を、演劇の言葉による補助的な時間軸で、どの

ようにして打破していくか試行錯誤する。お互いが補完し合う構造にしないと、すぐさま、“それぞれのジャンルが勝手にやっている”だけの、コラボレーションでもなんでもないものになってしまう。

2014年は、“ダンスという身体と、演劇という言葉をどのようにして舞台上で出会わせるか”が鍵となった。最初、チェン氏は私のテキストをどんどんカットしていき、というより、そのイメージをダンスに置き換えて創作し始めた。私は「それはコンテンポラリーダンスの文脈だ」と反対した。彼女は何を言われているのかが解っていなかった。コンテンポラリーダンスの創作過程では当然、テーマとなる情報ソースをもとに、イメージを膨らませて振付へと具象させて、作品を紡いでいく。しかし、そうやって作品を作っていくと演劇とのコラボレーションにならないよ、と私は声をかけたのである。せっかく書いたからカットをするなという話では断じてなく、企画の主旨といま一度しっかり向き合おうという提案だった。

チェン氏はスマートなアーティストなので、私の言うことを真摯に理解しようと努めた。結果、書かれてあるテキスト現行のままフルで活かし、かつ、自分のフィールドであるコンテンポラリーダンスを目指した。俳優たちも踊ることにし、チェン氏が最低限納得してもらえる水準まで、何度も反復練習をした。俳優もダンサーも頭も身体もフル回転だった。解らない解らない、出来ない出来ない、を繰り返していくうちに、いつしかこのコラボレーションで大切なのは、完成されたものではなく、過程をどのように見てもらうかである、ということを、言葉が通じなくてもお互いに本能で理解していた。

―『イリュージョン～記憶喪失で鈍痛中のテンプル～』の成功と、それから

私達は8月にこの作品をCCDCスタジオで発表、11月には「アジア舞台芸術祭2014」のメインプログラムの1つとして、東京芸術劇場シアターウエストで公演した。台北市での公演は連日満席で、急遽追加公演を実施。東京公演も、プロデューサーの宮城氏に「ダンスと演劇がこのような形で融合したのは、他に見たことがない。この芸術祭の主旨に沿った、一つの成功例ではないか」という風に大変お褒め頂いた。ダンスと演劇のコラボレーションという、初めての挑戦で確かな手ごたえを感じた。

さらに共同創作に取り組みたいと考えた私は、CCDCに再度のコラボレーションを持ちかけた。お互いのスケジュールや、理想とする会場、内容など、根気の要る擦り合わせののち、2015年の6月上旬に滞在制作、中旬に台南市と桃園市で公演することが決まった。

初めての海外での滞在創作は、右も左も分からぬまま引き受けたのが、有難いことに二年越しの2015年まで繋がることとなったのである。

○2015年『失憶中 玩笑篇。』共同創作

6月1日早朝、成田から台北へ発つ。

桃園空港へ降り立ち外へと出ると、湿気を孕んだ強烈な熱気が私を出迎えてくれた。一年ぶりの亜熱帯気候との再会。ホテルからの送迎タクシーに乗り込み、ロビーで通訳と合流してのち、CCDCのスタジオへと向かった。

一年振りに訪れた場所に変わりはなかった。ダンサーたちは、私を目にするなり笑顔を弾けさせた。それにつられて、こちらも笑顔を返す。直後に、マシンガンのように、英語と台湾語を浴びせてくる。ここでようやく私の身体感覚のスイッチ

が入り、頭と身体が繋がった。

CCDC 主宰のヤオ・シェーフェン（姚淑芬）さんにご挨拶をして、さっそく今回のプロダクションメンバー全員と昼食兼顔合わせ兼打ち合わせをしに、スタジオの外に繰り出すことになった。

CCDC スタジオは、MRT 中正記念堂駅と古亭駅のちょうど中間地点にある。日本のコンビニ、セブンイレブンや、ファミリーマートが目に入るたびに、またも身体が東京だと錯覚してしまう。こうして、些細なことで日本における日本の在り方、またはやり方をいい意味で裏切られつつ、自分の中の視点が変化していくのを楽しみながらいよいよ創作へと進んでいく。暑い地域でダンサーたちと話合いをする最中のアイスコーヒーは格別だった。

―コンテンポラリーダンスとは何か

話が前後するが、ここでコンテンポラリーダンスについて説明させて頂きたい。

台湾は、世界的に有名なコンテンポラリ―ダンスのチームが多く存在する。「クラウドゲート」など、別の畑である私ですら聞いたことのある有名ダンスカンパニーもあり、演劇よりコンテンポラリーダンスの方が盛んだという見方もあるようだ。このコンテンポラリーダンス、実は演劇との共通点も非常に多い。

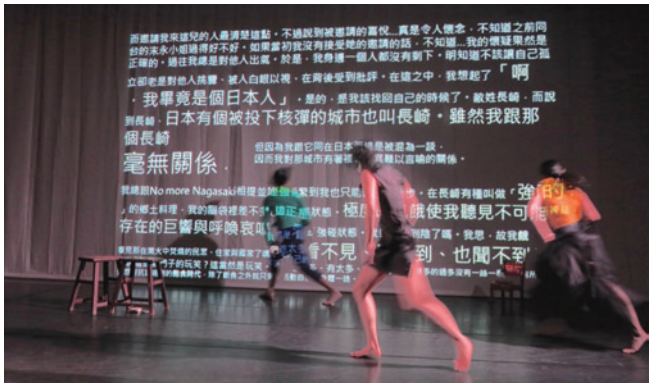
コンテンポラリーダンスの源流は、クラシックバレエとされている。そのクラシックバレエを基調とした身体性に加えて、バレエの厳格な形式を逸脱したダンス。ゆえにダンスの定義っていうのはなんだ？　ダンスとはなにか？を原理的に可能性として考えるダンス、と考えてみるといいかもしれない。

ダンスは一般的に言葉を扱わない。過剰な物語の説明が排除されている分、人間の身体、という原始的な視覚情報だけに絞られ、人間の存在という奇跡に対し、ダイレクトに触れられる可能性を秘めているともいえる。コンテンポラリーダンスは見ていて難しい、という声をよく聞くが、意味ではなく身体を観る、という目的をはっきりさせてしまえば、鑑賞回路が、案外簡単に開くと思う。

演劇では割とスタンダードとされている表現手法を、コンテンポラリーダンスでも選ばれることが少なくない。例えば、物語として語られた言葉を映像作品として別次元で作って、それを舞台上にプロジェクターで投影し、その中で踊ったりする。他にも観客を舞台上にあげてドキュメンタリー性を持たせる、古典文学作品を抽象化し作品化させるなど。通常のダンスのような、リズムに乗せて振付を踊るという形式からは凡そ外れたことが、まま行われる。コンテンポラリーダンスの歴史は浅く、演劇に比べると分野としてはかなり新しい。それを考えると、これらの手法は演劇に影響を受けたものと考えるのが自然であり、共通している部分があるのは当然なのかもしれない。そのうえで、それぞれ主体となっているのは、演劇ならば言葉であり、コンテンポラリーダンスであれば身体なのである。

リハーサルの様子

公演の様子①　ⓒ CCDC



公演の様子②　ⓒ CCDC

―CCDC のコンテンポラリーダンス

共同創作を行ったチェン氏が所属する CCDC は、国内外のいろいろなカンパニーとコラボレーションした作品を発表している。それは、純粋なダンスにとらわれず、できるだけ多くの手法を取り入れるためだという。

主宰のヤオ氏は「芸術は普遍性を持ったものなので、形式的なことに縛られてはいけない」と考えており、台本や演出といったことは、生活の中に基本的かつ普遍的にあるものだと考え、普段自分たちが取っている行動を作品の中に全部取り入れようという姿勢のようだ。ヤオ氏は、演劇とも多数コラボレーションしてきて、“言語を抜いて身体で表現することもまた、演劇である”と考えているそうで、演劇人としては大変興味深い。

今回、私が「台湾と日本のコンテンポラリーダンスは全然違うと感じている」という疑問をぶつけたところ、ヤオ氏はこのように答えてくれた。「台湾は、東アジアの中ではコンテンポラリーダンスが盛んなんですよ。アメリカのスタイルを踏襲してアカデミックな方向に進んでいて、優秀なダンサーも多く輩出しています。日本では、私が見てきた範囲では、アメリカの思想は取り入れられてなくて、ガラパゴス的に自分のスタイルを追求しているように思います。舞踏も入っていますが、戦争を知らない世代で枝分かれしてさまざまなスタイルができているので、戦後の精神的ダメージから出発したという当初の精神性は受け継がれていないですね。どちらかというと舞踏そのものよりも能楽などからの影響があると感じていて、ハイブリッドなものになっていると思います。」

―作品創作開始

到着した日の午後から、リハーサルを開始する。壮絶な 2014 年夏の創作過程を経て、2015 年の夏がある。お陰で今回は割とスムーズに創作が進められた。

渡台前の５月末にスカイプ会議を行った際、今回はチェン氏の主導で、よりダンスに重きを置いた作品作りを目指すことが決まっていた。彼女は、昨年を乗り越えたことで、テキストに対する感覚が格段に研ぎ澄まされており、彼女が構成した台本は素晴らしいものあった。同い年でもある彼女のビジョンを、私は素直に信頼することができ、ディレクションも含めてほとんど任せた。彼女もまた、要所要所で、私に意見を求めてくれるあたり、相互の信頼関係は非常に良いものであったことは、疑いようがなかった。

ただ、今回は昨年よりも時間的な制約（滞在期間が短かった）があり、そのことは演劇人サイドとしては多大なる負荷となった。６月１日～９日

チェン氏と佐々木のアフタートーク

の稽古期間、私は日本から参加した俳優・タカハシカナコ氏と演劇のパートの調整にひたすら時間をかけた。昨年から引き受けたバトンをより遠くへと運べるよう最善を尽くす他はない。それは、演劇とコンテンポラリーダンスの未来のため、また日本と台湾の未来のためでもあった。

―作品内容

今回、私が書き下ろしたテキスト（脚本）は、チェーホフ『煙草の害悪について』を下敷きにした、昨年の作品の続編である。

あらすじ：長崎さんは、ストレスのため食べ過ぎて太ってしまう。そんな彼女を、世間は「あいつは太っている」と冷たい目で見る。人間の世の中はデタラメで、世界には戦争が絶えない。心を痛めた長崎さんは、CCDC に弟子入りしてダンスを習い、ダイエットをして着物を着こなし、日本人のアイデンティティを取り戻すことにした。

主人公が、社会での生き辛さの中でささやかな幸せを見出す姿を、コミカルなタッチで描くように努めた。劇構造を説明すると、昨年は俳優三名とダンサーが三名の計六名だったのに対し、今回はテキスト上では基本的には俳優が一人で語るという構造のもので、それを俳優一名と、ダンサーが三名という計四名で構成された。

―チェン氏との対話

今回は二回目ということもあり、チェン氏と作品そのもの以外の問題意識を共有する時間を持つ事が出来た。日本と台湾の歴史的背景をリサーチした私は、今回のテキストで戦争について取り上げずにはいられなかった。チェン氏は私の問題意識に反応し、演出に取り入れてくれ、以下のようにお互いの考えを共有した。

佐々木「戦争のことになると、どこかで語ってはいけないというブレーキがかかってしまうが、それぞれの国の視点というものがあって、どれが正しいというわけではない。かといって、事なかれ主義になるのではなく、もっと違うことが表現としてできるのではないか。僕ら（1980 年代前半生まれ）は制度の変化に翻弄された世代だが、いま日本全体としても、どういう方向に行ったらいいのか探っている状態だと思う」

チェン「私を含め同世代の人々が置かれている状況やそれに対する影響を考えると、どうしても戦争に行き着く。私たちの世代は、無気力だと感じている。例えば、（CCDC 主宰の）ヤオさんは私のことを信頼して下さっているが、それは見誤りだと思ってしまうほど、自分のことを無気力だと思っている。」

どちらの国も、アーティストが置かれている状況に変わりはない。自分たちが活動していく意義を、社会に問いながらやっていくしかないよね、と私達はお互い頷き合った。

○公演の様子

公演記録

2015 年 6 月 9 日・10 日　19：30～

於 滬莎藝術展演中心 永華館

2015年6月12日 19：30～
　於 桃園市文化局 演藝廳
共同演出　陳維寧（振付）、佐々木透（脚本）
出 演 者　タカハシカナコ、李蕙雯、劉家瑞、
　　陳雅筑
芸術監督　姚淑芬

―台南市へ

2015年6月8日、早朝。私たちは、台北駅の高速バスターミナルにいた。それにしても、今年の台湾は雨が少ない。

昨年は台北市のみで公演したのに対し、今年は、台湾の台南市と桃園市の二カ所ツアーを実施した。台南市での会場は、涴莎藝術展演中心 永華館である。

五時間ほどバスに揺られ、一行は台南市に到着した。日差しが強い。台北市のそれとはまったく違っていた。これまで見た台湾の景色とも全く違っていた。南国色がより強くなり、都市部の洗練された街並みは影を潜め、よりワイルドな匂いを放った街が目の前に現れた。私の身体はすっかり東京を脱ぎ捨てて、異国の地のリズムに鼓動が重なっていくのを感じた。

スケジュールはタイトである。到着したその足で、さっそく会場入りし、舞台セッティングから明かり作り、サウンドチェックまでをすべて済ませ、翌日の昼にゲネプロ、夜には本番である。俗に「乗り打ち公演」と呼ばれるものに近いスケジュールだ。演劇で考えると、照明や音響を入れた設備のある会場でやる場合、どんなに短くとも、中一日は必要だ。しかしそこはダンスカンパニー、照明、音響がしっかりできれば、あとは身体さえあればすぐに公演ができるという小回りの良さを十二分見せつけられた格好だ。私も普段、劇場入りから本番までは速い方であるが、さすがに、ここまでの規模でこのスケジュールは経験がなかった。

公演前、ホール入口にお供え物

会場は白を基調とした木製の建物だった。柔和な顔付きでどことなく海の匂いを感じる雰囲気。中は木目調で統一された空間だった。普段は、チェロやバイオリンなどクラシック音楽の演奏会が多いのだという。少し大きなギャラリーとしても機能しそうな雰囲気で、100名前後は十分に収容できる大きさだった。

一通り、準備が終わり、台南初日が終わったと思ったその時だった。突然、ハッピーバースデーコールが起こる。忙しさですっかり忘れていたが、6月8日は私の誕生日だった。人生で初めて海外で歳を取った。こっそりケーキを用意してくれていたことは、嬉しかった。みんなの気持ちが有難かった。

―台南公演

翌日。いよいよ、本番だ。何が不安かというと、客層がまったくわからない。異国の地、知らない土地、どんな人が見に来るのだろう、そもそも、来るのか？　そんな不安ばかりが駆け巡った。

本番前に、CCDCのカンパニーの皆さんは、ホールの前に果物などを供え、お祈りをする。私も線香を手に、四方へ頭を下げた。

そして、開場時間を迎える。私の不安をよそに、

みんなで集合写真

観客席はあっという間に埋まってしまった。入りきらず、立ち見客まで現れてしまった。そして、本番。観客は大盛り上がりだった。日本語、台湾語入り乱れる内容だが、観客席は皆とても集中して観劇していたし、なにより反応がビビッドだ。日本のお客さんとはまったく違う。途中、日本人俳優のタカハシが、客席に向かって、「皆さん、こんばんは！」と日本語で挨拶するクダリがあるのだが、観客は、恥じらいを見せる風でもなく、皆一様に、「コンバンワ！」挨拶を返すのである、しかも日本語で。終演後に急遽、アフタートークを実施することになった。熱気冷めやらぬその勢いで、作品に対する質問などを観客から受けた。とにかく熱心だ。その勢いは、翌日の二日目も同じであった、いや、それ以上だったとも思う。こうして、台南での公演は成功として見てよい様相であった。

二泊三日の弾丸台南ツアーは、二日目の本番を終えたと同時に、台湾高速鉄道で、その日中に台北市に戻るという過酷さでもって終了した。「この高速鉄道は、日本の新幹線の700系車両なんですよ」という通訳の説明も上の空になるくらいの疲労感だった。

―桃園公演

6月11日、午前9時。台北駅に集合。台湾鉄道にて、桃園駅を目指す。ここでも台南公演同様、当日会場入り、仕込み、翌日本番というスケジュールである。昨晩、深夜に帰ってきているにも関わらず、皆タフだ。

桃園市文化局 演藝廳は台南市の会場とはまったく異なる、いわゆる、公共ホールである。台南の会場の有に倍はあり、観客席も300名は入る大きさだった。まったく違う会場で行う場合、やはり入念な準備時間を考えるのが演劇なのだが、ここでもCCDCは猛烈な勢いで準備を進めていく。

準備中、私とチェン氏の間で、美意識の相違による意見の対立が起こった。会場が広くなるので、マイクを用意したいのだという。演劇人として私は真っ向から対立した。本来劇場は、そんなものをしなくても、声が聴こえるようにある程度設計されているので、できるだけそういった、視覚的にも聴力的にも邪魔になるようなことは避けたかった。結局私が一歩引いて、ではとりあえずマイクを設置してみようとなった。

すると、スピーカーから謎のノイズ音が発生し始めたのである。気になって仕方なかったが、どうも、CCDCのみんなは気にならない様子だ。タカハシ氏も、私と同じように気になるという。これはどういうことなのかと、悩んでいると、通訳が私の疑問にこう答えてくれた。「台湾人は潜在的に音に対して鈍感だったりする」。確かに、台湾鉄道の発車サイレンは、日本のような優しいものではなく、けたたましいベルの音で、怖いぐらいに鳴り響いていた。通訳曰く、それくらいしないと聴こえない、或いは意識されないのだという。

ここへ来て、人種の違いをこの局面で痛感するとは思いもよらなかった。だが、時間も無いなかで、すべてを解決することは難しかった。このノイズの問題は、ギリギリまで粘ったが、原因を突

き止めるには二日から、三日はかかるということで断念せざるをなかった。そして翌日、桃園の本番が粛々と行われたのである。挨拶のところはここでもやはり同じように会場から日本語でレスポンスが起こった。

反応は、台南同様、上々だった。

―公演を終えて

分かり合えない部分だったり、妙に理解できたりと、そういうことがあって、今回の公演が成り立っている。桃園市での公演で起こったノイズの問題は、日本と台湾の間の何か埋められない溝のようなものだったのかもしれない。けれども、私たちはそのノイズに対してどうしていけるのか、またどう関わっていくのか。新たな課題として、この公演が私たちの次なるステージへ、逞しく想像力を育てたことは間違いない。終わってみればあっという間だった。兵どもが夢のあと。終演後は早々に撤収され、ここで、本当に私たちの作品が行われていたのだろうかと思うほど、静かになっていた。

＜佐々木透・台湾での見聞録＞

文・リクウズルーム事務局

日本と台湾の観客の反応の違いを目の当たりにし、台湾の演劇事情や文化行政に興味を持った佐々木は、今回台北市文化局の Dr. シェリー・チッセ・ワン（王紀澤 以下、シェリー）氏との対談を実施した。シェリー氏は、2013 年のアジア舞台芸術祭で佐々木の作品を見て、チェン氏との共同創作を勧めて下さった、この企画になくてはならない方で、対談は大いに盛り上がった。以下、その一部をお伝えする。

（実施日：2015 年 6 月 5 日　於 CCDC スタジオ）

―――――――――――――

佐々木◆　今日は台北文化局のシェリーさんにお話を聞いてみたいと思います。よろしくお願いします。

まず、シェリーさんはとても芸術に深い理解があると思ったのですが、どうして演劇とかが好きなのか、まずお聞きしたいです。

シェリー◆　私は大学時代から演劇専門で、それから英国で演劇の博士号を取り、いまの仕事は台湾に戻ってきて初めての仕事。

佐々木◆　芸術全般でもいいですが、特に台湾の演劇を客観的にどのようにお考えですか。

シェリー◆　宮城さん（筆注：宮城聰・アジア舞台芸術祭プロデューサー）の言う“若者の演劇”のように、みんなが集まってやりたいことをやり、ただ自分のやりたいことだけを見て、外の世界……みんなが見たい理解できる演劇に関しては何も考えていないように、感覚的に感じています。

佐々木◆　社会と演劇のあり方についてどのようにお考えでしょうか。

シェリー◆　台湾では、芸術作品は必ず公的資金が入っていることになります。

一般的に、台湾の皆さんは芸術に関して大して関心がないし、観たところで感想の述べ方もわからない状況です。自分が子供の頃、つまり昔から、この状態が続いています。

それを変えるには、結局アーティストが大衆に対して語りかけて、作品をできる限り陽の当たるところに出してくれないと、いくら公的資金を入れても変えようがないと思っています。

しかも台湾の場合、劇場に芸術作品を観にくるのは佐々木さんと同じような世代の若者で、どうしても 35 歳以下の年齢になる。それを超えると仕事なり家庭なりで、芸術に気を配る気力がなくなってしまうんですよ。

佐々木◆　アーティストの表現したいものが、必

ずしも社会にマッチしないという問題がある。表現者はどういう考えを持てばいいか、どう関わっていけばいいかと悩む人がたくさんいるように思います。

シェリー◆　自分の見てきた佐々木作品の場合、その辺は心配しすぎだと思っています。それほど現代的な精神構造から外れてはいないし、それに、観客に見せるような芸術家はどうしても観客を信頼しなくてはいけないので。その辺りは信心深く……信じてあげてください。

佐々木◆　僕が去年初めて台北で創作をした時、まさに対話だと思いました。…例えばアーティストと社会、観客との対話であり、お互い分からないところから、対話を経て、少しわかるかな？という所に行けたら良いな、と思っていました。ただ、それはなかなか難しかった。

　だけどシェリーさんは、アーティストをよく理解されているし、僕はようやくスタートラインに立てていると感じたので、今回ぜひお話を聞きたいと思ったのです。

シェリー◆　去年出来上がった『イリュージョン』は、かなりのレアケースだと思います。ただコラボレーションするだけでなく、両方とも自分に対しても相手に対しても正直にならないと出来上がらないような代物で、本当に珍しいものと思っています。

佐々木◆　ちなみに僕、日本では「戯曲のあり方を問う」ことをテーマに作品作りをしています。

シェリー◆　台湾では文字・テキスト「のみ」を重視した演劇というのは、一時期ほとんどいませんでした。戯曲・テキストを中心にした台湾で有名な劇作家を語ると、10分かけてひとりくらいしかでてこない、そんな状況です。そのかわり有名なダンサーというか振付家、というのは結構います。

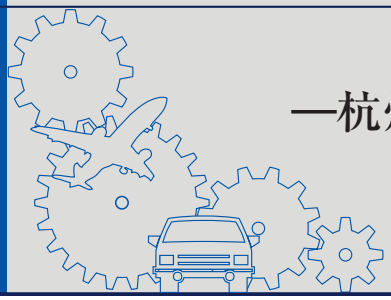
佐々木◆　台湾で注目しているアーティストはいますか。

シェリー◆　「シェイクスピアの妹」です。昔、自分の博士論文でも取り上げたのですが、その劇団は舞台の上で文字や音を操って表現するのが得意な劇団でした。今年4月のTIFA（筆注：台湾国際芸術節）でも、音を中心とした演劇をやったそうです。その劇団に注目していたのは、劇団が「作品がいかに観客と交流するか」に注目していたものだったからです。

佐々木◆　すみません遅くまで。本当にいろいろありがとうございました。

シェリー◆　いろいろ話せました。ありがとうございます。今度の作品も成功しますように。

日台ビジネスアライアンスによる中国展開事例を探る―２



―杭州友佳精密機械有限公司を訪問して―

亜細亜大学アジア研究所嘱託研究員　藤原弘、根橋玲子

（１）　友嘉実業集団の概要と日台ビジネスアライアンス

台湾大手工作機械メーカーの友嘉実業集団（以下友嘉集団）は、「誠実と信頼を第一にし、顧客に対し責任を持つことが、永続的経営に繋がる」という企業理念をもとに、1979 年に設立された（表１）。技術を重視し、品質第一を掲げて、卓越した精神を企業経営に生かしている。現在同社は、工作機械事業部、PCB 事業部、エネルギー事業部、産業設備事業部の 4 事業部を有し、国内外で合弁事業を行うなど、友嘉集団が持つグローバルネットワークと経営資源を有効に活用している。同社は、顧客第一や永続的経営を社是に掲げており、アジア地域で優良なサービスを行う工作機械メーカーとして受賞するなど、1993 年より各方面から賞を授与され、グローバルで卓越した経営を行っている。

友嘉集団の製造部門である工作機械事業部は 1985 年に設立、伝統的な鋸盤および研磨機製造に従事してきた。上記 4 事業部のうち、工作機械事業部ではオリジナルブランド FEELER や、LEADWELL を筆頭に、世界 28 ブランドで 44 工場を有している。友嘉実業集団の工作機械部門は、2014 年に計 18 億米ドルの売上高を達成している。

同社は台湾内の同業他社に比較すると後発のメーカーであったが、1990 年代にはオートバイ用工作機械製造を開始、2000 年から同社は自動車用工作機械製造に参入するなど先進的な取り組みを行ってきた。また台湾企業の投資としては早く、1993 年より中国大陸への投資を行うなど、積極的な海外展開を行っていった。その結果、設立から 36 年間で 74 社を率いる集団となり、現在同グループの従業員数は、グローバル社員も含め 5300 名となっている。

表１　友嘉実業集団の企業概要

会 社 名	友嘉実業集団
設　　立	1979 年 3 月
住　　所	台北市永吉路 186 号友嘉実業大楼
資 本 金	N/A
従業員数	4,974 名（2015 年 5 月）
事業内容	自動車用工作機械等の設計・開発・製造
代 表 者	朱志洋　總裁
売 上 高	グループ連結 35 億米ドル（2014 年）
ウェブサイト	http://www.fairfriend.com.tw/

出所：　同社資料より作成

また、2014 年 5 月には、友嘉集団は、総合工作機械・産業機械メーカーの老舗である株式会社池貝の株式を、中国上海電気から取得しており[1]、その他、優れた技術力を有する日系中堅・中小企業との資本提携も多数行っている。対日投資を積極的に行う友嘉集団朱志洋総裁によれば、同社が基盤構築や経営支援を行うことにより、日本企業が優れたものづくりを継続的に行えるようにすることを前提に、日本企業との M&A の意思決定を行うという。実際に、上海電気からの株式譲渡の翌月には、池貝は、月次決算ベースで早くも黒字化し、現在経営状況は大幅に改善しているという[2]。

[1] 2014 年 5 月 13 日付株式会社池貝プレスリリース。
[2] 2014 年 11 月 20 日友嘉集団朱志洋総裁へのインタビューによる。

（いつまでも忘れない～日本企業との深い絆とグローバル展開）

1979年3月15日、朱志洋総裁は友嘉實業股份有限公司を設立し、当初は貿易会社として7人でスタートした。社員が30人になった時、同社発展のきっかけとなる最初の大きな業務が舞い込んだ。それが日本の神戸製鋼（コベルコ）の建設機械の台湾地域販売代理店であった。朱志洋総裁は当時毎日16～17時間も懸命に働き、それを見た従業員が一丸となり、企業を盛り立てたという。その結果、1981年には、全国公民営企業500社輸出入貿易ランキング88位となった。現在、同社事業は多角化、国際化を行っており、建機事業は事業全体の0.1%にも満たないが、最初のパートナーのコベルコに、同社経営陣は現在も深い敬意を払っている。

また同社は、1983年には日本最大の工具メーカーであったリョービ株式会社の電動工具及び木工工具の台湾販売代理店を任命され、この経験から現在の工作機械製造の基礎技術を学んだ。さらにリョービの台湾で初の海外工場の合弁パートナーとなり、台湾に「良友精工（股）有限公司」を設立、ドア開閉器等の金属部品の生産を開始した。その他、機械分野におけるグローバルトップメーカーとの合弁実績や、スピード感のある経営判断により、1989年には、台湾にCNC工作機械専用工場設立、マシニングセンターを生産開始した。

友嘉集団は、1990年代から今日に至るまで、台湾での工作機械製造分野において、同社品質水準及び新製品開発能力を高く評価され、台湾の工作機械研究発展イノベーション大賞や国産優良機械賞金賞等、多くの栄えある賞を受賞している。また、2000年以降は、日本のアネスト岩田グループとの生産塗装設備関連での合弁事業を行うなど、製品はもとより生産設備や技術サービスにおいても、同社は国際水準に達するべく、技術レベルアップの努力を行ってきた。

このように、友嘉集団は設立以来、販売代理店から製造販売業へ、伝統的な工業製品からハイテク産業へと業態変化を遂げてきた。これは日本企業との弛まぬアライアンスを行うことで達成できた飛躍的発展であり、これが同社のグローバルでの成功につながっているといえよう。

（中国ビジネスでの圧倒的プレゼンス～足掛かりは日本の専門商社から）

友嘉集団は、1990年に入ってから中国事業に力を入れ始めたが、同社が中国市場参入を行う契機となったのは日本の専門商社である茶谷産業との取引がきっかけである。そのため今でも同社は、茶谷産業を重要なアライアンスパートナーとして尊重している。

1919年に創業した茶谷産業は、欧米各国への雑貨輸出を専業としており、1940年代に日本の専門商社の先駆けとして、世界各国（ニューヨーク、リオデジャネイロ、上海、京城、奉天等）に支店や出張所を開設していた。1950代には、中近東方面への自動車・自動車部品輸出の先駆者となるとともに、1960年代には建設、農業、荷役等各種機械類の取扱を開始した。1964年に当時の日中友好商社の指定を中国政府から受けるとともに、輸出振興に寄与した功績により、第一回内閣総理大臣表彰を受賞している[3]。

この中国市場に強いコネクションを有する茶谷産業を通じ、1991年には中国に初めて、同社工作機械のマシニングセンターが輸出されることと

[3] 茶谷産業ホームページによる。同社は、1970年代に米国・スイスからの機械・切削工具輸入や日本からの精密機器、工具、ステンレススティールパイプ等技術製品の欧米向け輸出を行った。1980年代には電気・電子機器分野の先端技術やグラスファイバー等新素材取引を開始。1990年代には液晶バックライト技術を開発、台湾瑞儀光電と技術提携し、台湾でバックライト生産も行った。

なった。これが、その後友嘉集団が中国での直販体制を立ち上げる足掛かりとなった。

1993年中国杭州に、杭州友佳精密機械有限公司が設立され、同年北京事務所が開設されると、中国企業との直接取引により、同社の工作機械の大陸での販売が開始された。1997年に上海事務所が設立し、沿海部の販売拠点となった。2001年には杭州友佳にて工作機械の製造が開始された。また2006年には、香港上場を行い中国事業への投資を拡充するとともに、同年初めて中国地場企業との合弁事業を行った。2010年には台湾株式市場上場も果たした。

（中国杭州本社を軸とした、広範な中国内販ネットワーク網）

友嘉集團副総裁であり、友嘉集団の中国現地法人である杭州友佳精密機械有限公司董事長（22年大陸駐在）の陳向榮氏は、杭州台商協会の理事を10年以上務めており、地元政府との繋がりも深い。中国では、日系大手商社数社と合弁事業を行っているが、日本語堪能な陳氏は、日系企業経営陣からの信頼も厚い。中国での指揮命令系統は、現地マネージャーから本部長、本部長から副社長のルートで決裁を行っているが、日系企業への対応は、朱総裁、陳副総裁のトップダウンで行うことが多い。

杭州友佳精密機械有限公司の本部は杭州にあるが、2014年現在、友嘉集団は中国に90箇所の支店[4]を有しており、営業スタッフも10か所以上に駐在している。集団内の企業別では、杭州友佳（FEELER）は37箇所、杭州麗偉（LEADWELL）は19箇所、杭州友高は26箇所、上海友盛は8箇所の拠点を持っている。この90箇所の中国拠点ネットワークが友嘉集団の財産であり、成功の基礎となっている。また、メンテナンス業務は北、東、南、内陸で各1か所ずつ拠点を指定することで、現在は北京、杭州、広州、成都の拠点を中心にして、中国全土をカバーしている。

陳副総裁は、杭州を中国法人の本社とした理由として、以下の5つの理由を挙げている[5]。第一に人材である。杭州には、中国で3番目に大きい浙江大学を擁しているほか、「大学城」という名の通り、理工系を含む30以上の大学を有しており、継続的に優良な人材供給が期待できる。第二として交通インフラである。港、国際空港、高速道路、新幹線のインフラが整っており、運送コストも安いという。また第3に、外注・協力工場の存在である。浙江省は90%が中小企業であるが、特に台湾系企業の集積が多く、鋳物、板金、塗装、加工など工作機械製造に必要な裾野産業群が構築されているという。第四としては、緑が多く、人文素養が高いため、治安・住環境が良い。第五として、地場政府のサービスや業務効率の高さを挙げている。これらを総合的に判断し、同社中国統括の本社として、杭州の地を選定したという。

（友嘉機電学院設立による中国での人材育成の布石）

さらに2008年には、杭州において、同社人材育成と地場産業のレベル向上を目的として、杭州市政府とともに友嘉機電學院が設立された。友嘉機電学院は、「天国のシリコンバレー」をキャッチフレーズとした、杭州職業技術学院の敷地に立地している。33,200平米の敷地面積を持つこの学院は、高校卒業後に学ぶ工業短大のような位置づけであり、NC技術、機電一体化、金型設計製造、機

[4] 事務所は、北京、長春、廣州武漢、貴陽重慶、成都、西安、青島、寧波、温州、上海、南京、瀋陽、哈爾濱、南昌、廈門、柳州、深セン、無錫、常州、蘇州、合肥、鄭州、濟南、大連、煙臺、東莞、天津、長沙等に設置されており、1州に1～2か所の拠点を有する。

[5] 2011年11月に行った東京大学MMRC日台アライアンスPJのヒアリングによる

械設計製造、電気自動化技術、コンピューター制御技術、工業設計、車体点検と修理技術、技術サービスなど9つの専攻を有している。同学院は、杭州市政府との合弁事業であるが、友嘉の名前を使用して運営しているという。

現在全学生は1,700名（ピーク時には計2,300名在籍）おり、毎年600～800名の卒業生を輩出する。このうち100名は友嘉グループに入社し、その他一部の学生は同社顧客への紹介が行われ、友嘉集団の取引先企業に入社している。エンドユーザーが友嘉から機械を購入しても、操作ノウハウがないと使いこなせないという声があり、機械オペレーターとして、学院の卒業生の紹介を行うようになった。学院OBは中国全域に分散し、それぞれ精密金型、自動車部品等の企業に就職していることから、友嘉集団はこうしたOBが活躍する企業が、将来の取引先になることを期待している。

（日本式の企業理念や従業員教育を、台湾から中国へ）

陳副総裁によれば、友嘉集団の経営理念として、① Impossible turns to possible.（不可能を可能にする。）② There is no excuse to do my best.（ただ一生懸命にやる。）の2つを挙げている。①の「不可能を可能にする」の例としては、同社は30年前には小さな会社でお金も少なかったが、現在は傘下に多くの優良企業を保有する大手企業となっている。②の「ただ一生懸命にやる」の例としては、会社として社員に「必ずやってみる」ということを推奨し、それが社員ひとりひとりの「改良」、「改善」の意識改革に繋がっている。このような現場での社員教育が、社員の能力アップにつながっているという。

友嘉機電学院全景

出所：友嘉実業集団HPより

同社は経営哲学として、「誠信」と「責任」を重視しており、社員に対しても顧客第一主義を説いている。同社はリーダーシップを重視しており、管理職に対し社員教育の重要性を意識させている。例えば「顧客満足」や「責任感」などはこれを習慣にすることが重要であり、管理規則に頼るのはだめであるという。例えば、同社が積極的な投資戦略や特許戦略をとるのは、「同社が強くなるために必要な経営戦略である」という認識を社員全員で共有している。

同社の企業文化は、①尊敬（Respect）、②包容（Gathering）、③感謝（Appreciation）の3つであり、この企業文化が従業員の習慣になるよう徹底した従業員教育を行っているという。「尊敬」とは、顧客だけでなく子会社や従業員にも表されるべきものであり、陳副総裁も、管理職や従業員一人一人を尊敬しているという。「包容」とは、例えば問題が起こった時に、意見を聞き、改革をする、という繰り返しが重要であり、意見を取り入れることで改善が行われるという良いループを期待しているという。

また、「感謝」について、陳副総裁は「073855理論」として、従業員に説明をしている。「感謝」が顧客に言葉で伝わるのはたったの7％であるが、38％は顧客への態度に現れ、55％は顧客への気遣いに現れるという考え方である。同社社員は、必ず会議室の入退出時に一礼をし、顧客にお茶を出す際にも礼をするが、こうした行動は人が見ていなくても行うべき、と陳副総裁は考えているという。

かつて日本企業が重視していた「心の教育」が、日本企業とのアライアンス経験を蓄積した友嘉集団により、台湾や中国の地で行われている。一方で、同社は自動車エンジンや変速機部品用工作機械製造を行うドイツ大手工作機械メーカーのMAGグループの買収計画を発表しており[6]、名実ともに世界最大規模の工作機械メーカーの1社となることが予想されている。友嘉集団は、日本式経営とグローバル経営を融合したハイブリッド経営で、グローバル展開をますます加速していくだろう。

（2） 杭州友佳精密機械有限公司を訪問して

杭州友佳精密機械有限公司の企業概要
設　　立：1993年
立　　地：中国浙江省蕭山経済技術開発区
工場用地：66,000㎡
総投資額：1,450万米ドル
従業員数：2,000名（台湾人スタッフ20名）
製　　品：CNC工作機械　旋盤、縦型・横型加工中心系列、梁式龍門5の面加工機大型銑鉄加工センター、各種グラインダー等
主要顧客：南京机電液圧工程研究中心、天津豊田汽車、仏山本田汽車　長安汽車、南通宏运模具机機、西安工業大学

友嘉集団は1979年に設立され、CNC工作機械　PCB工作機械　産業設備、グリーンエネルギーなどの四大事業部門を有し、全体で47個の製品ブランド、本、米国、ドイツ、イタリア、フランス、ロシア、中国等に75か所の海外・営業拠点をもつ台湾のグローバル企業であるが、今回は同社の杭州友佳精密機械有限公司を訪問し、友嘉集団の陳向栄副総裁に同社の中國でのビジネス戦略についてインタビューしたので、以下に紹介する。

（品質重視の経営を徹底）

杭州友佳精密機械有限公司の親会社である友嘉集団はグループ全体で年間6万台のCNCマシーンを世界市場に供給する台湾のグローバル工作機械メーカーであり、ボーイング、フォード、シーメンス、トヨタ、ホンダといった品質に厳しい顧客企業に各種工作機械を供給していることから、品質管理には相当の気を使っている。

中国に20年以上駐在する陳副総裁はまず最初に杭州友佳精密機械有限公司のNC工作機械等の現地部品調達率は90%（内訳は中国企業50%、在中国台湾企業25%、在中国日系企業25%）に達していることを強調した。

友嘉集団は中国市場ではCNCマシーンの最大のサプライヤーであるが、最近は日本企業、韓国企業そして同業の台湾企業等との競争が激化していること、さらに販売先の80%が価格にうるさい中国企業であることからコスト削減を徹底するために、中国の部品メーカーからの調達を進めざるをえないとのことであった。これら中国企業を中核とした企業の60%が発注を繰り返すリピート顧客とのことである。このような中国企業をターゲットとした今後のビジネス展開の方向として、中国内陸部にも目を向け、同じ台湾企業である富士康が進出し、40万人の従業員を雇用している河南省の鄭州に2017年までに生産拠点を設立する方向で準備しているとのことである。

残り10%が台湾と日本からの輸入調達であり、コスト高になるため枢用部品に限定されている。杭州友佳精密機械が部品調達を行う企業は、中国部品メーカーを含めて台中の台湾部品メーカーを中心に1,100社に達している。このうち中国部品メーカーは約500社程度とのことである。これら

[6] 2015年06月23日付日刊工業新聞による

中国企業に対する当社の品質基準を徹底するために台湾人技術者を派遣し、技術指導を行っているとのことである。当社の台湾人スタッフは20名と多いが、この台湾人スタッフの多さは当社の品質基準が徹底されていることを示すものといえよう。

同社の生産ラインにおいても中国部品メーカーから調達した部品は全量検査し、生産ラインで組立加工したあと、品質検査し、さらに顧客企業に供給するまえに検査部門で最終検査を行う体制をとっているとのことである。

中国市場では中国企業が主要顧客となりつつあるが、当社も台湾企業といえども、これら企業からの代金回収が大きな問題となりつつあるとのことであった。

（人材の現地化を目指す）

友嘉集団の人材活用に関しては、すべての海外拠点において人材の現地化を徹底していることである。陳副総裁は「ドイツ、イタリアの工場の社長はすべて現地人であり、ドイツに20年以上住んでいる台湾華僑とイタリアに27年住んでいる中国華僑を配置しているだけで、実際の経営の権限を現地人の経営者に付与している。」とのコメントが返ってきた。

ここ杭州友佳精密機械有限公司においても、全従業員2,000人中台湾人スタッフが20名と全体の1％程度である。実際の経営権は中国人に付与する方向で現地化を進めているとのことであり、権限と責任を一体化し、企業経営に関しては、中国人スタッフに自由に発言させるようにしているとのことである。

当社の売り物である高品質、コスト競争力のあるNCマシーンを今後安定的に生産、販売していくには、熟練技術者、熟練工が不可欠となっている。しかし、ここ杭州市においてもこれら中国人従業員の平均賃金上昇率は2－3％であるが、転職率は年間で8～10％にも達しているとのことである。

同社は杭州市の学生支援センターを通じて大卒を採用しているが、事務系のスタッフは生産現場

（杭州友佳精密機械有限公司の生産ライン）

（工作機械の組み立てに使用される部品）

に降りて、その実態を認識する意欲がないことが問題とのことであった。

同社の経営陣を含めた平均給与は、各種手当てを含むと 4,300 元～4,600 元であり、当地の浙江大学卒の基本給が 2,300 元、短大卒が 1,800 元程度とのことであった。

このように転職率が高まる方向にあるものの、当社の近辺では労働争議は発生していないとのことであった。

（職業訓練センターで人材育成を目指す）

ここ杭州市の下沙工業園区には杭州市と企業の共同で 2002 年に設立された杭州職業技術学院という職業訓練センターがある。このなかには東南大学の経営する技術学院をはじめ四つの技術学校があるとのことである。

全体で 1,700 人程度の研修生が 3 年と 4 年の研修期間で技術研修を受けており、杭州友佳精密機械有限公司もこの職業訓練センターの中に友嘉机电学院という技術学校を 2011 年位に設立し、技術者の育成に注力している。毎年高卒、中卒の社会人約 600 名ほどが応募してくるとのことである。

この職業訓練センターの研修状況を見学させてもらったが、研修生は 10 名前後で 1 名の先生について集中的に技術教育を受けている。教室には一部屋に 5 台のカメラが配備されていたり、CAD CAM などさまざまな装置があり、それを活用しながら女性の教師（NC 専門家）を含む 70 名の技術者が技術教育をしているとのことである。年間の授業料は 7,000 元程度のとのことであるが、研修生は 18 歳程度の若者が多くみられた。

この訓練センターのなかでは、3 年、4 年の研修だけでなく、3 か月以下の短期の研修もエレベーター工場で実施しており、その研修成果に関して、① 21 日の研修期間を終えるとエレベーターの点検、検査ができるようになる。② 35 日の研修期間を終えると、大きな問題をチェックできる、

友嘉機電学院の人材育成センター

杭州職業技術学院

とのことであった。

さらに3－4年の研修を修了した卒業生に対しては、パナソニックなど日本企業からの募集もあるとのことであり、ここでの研修成果の高さが窺われた。この職業訓練センターの中には日本人技術者はいないが、将来的には日本人技術者も採用する方向にあるとのことであった。

杭州友佳精密機械有限公司のような台湾企業もものづくりの人材を育成するために、このような職業訓練センターの充実に注力していることは、中国における日台ビジネスアライアンスの一つの方向性を示唆するものといえよう。

＊本稿（1）は、2011年度（財）交流協会共同研究助成事業（人文・社会科学分野）「台湾人ビジネスマンのライフヒストリーから見えてくること：日台アライアンスを成功に導くキーパーソン」調査報告書（プロジェクトリーダー：東京大学大学院経済学研究科新宅純二郎教授）から抜粋した原稿を、本誌掲載用に加筆修正したものである。調査プロジェクト及び当報告書作成に多大なご尽力を頂いた東京大学大学院経済学研究科新宅純二郎教授、新潟大学経済学部岸保行准教授、およびヒアリングにご協力頂いた友嘉実業集団朱志洋総裁、陳向榮副総裁に心よりお礼を申し上げたい。

（文責：根橋）

＊本稿（2）は、東京大学経済学研究科新宅純二郎教授との合同調査による杭州でのインタビューデータを活用して作成している。本調査実施にあたっては、亜細亜大学アジア研究所所長の石川幸一教授をリーダーとするプロジェクトの研究助成を活用した。なお、本稿の文責は全て執筆者にあり、いずれの組織や団体の意見を表明するものではない。

（文責：藤原）

台湾内政をめぐる動向（2015年5月上旬～6月上旬）

国民党の総統候補党内予備選の実施、蔡英文民進党主席の訪米

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

中国国民党の次期総統候補を選出する党内予備選には、有力者が出馬を回避し、伏兵の洪秀柱立法院副院長だけが出馬し、6月12-13日の世論調査で党内規定を上回る支持率を獲得し、公認候補に内定した。7月19日開催予定の全国代表大会で正式に決定する予定。蔡英文民進党主席が、5月末から6月上旬にかけて訪米し、国務省関係者、国会議員、シンクタンク関係者と公式、非公式の会談を行ったほか、各都市の華人団体の会合にも出席し、支持を訴えた。

一、次期総統選挙の国民党の党内候補の選出

国民党党内予備選の届出は、評価の高い人物がこぞって出馬を見合わせた結果、それ程評価の高くない洪秀柱立法院副院長と楊志良元衛生署長が済ませたが、関連書類の不備から、楊元署長は審査に合格せず、洪副院長一人だけが登録を完了し、電話による世論調査に進み、党内規定をクリアし、公認候補内定となった。

本節では、党内候補登録前からの動向を整理する。

1．党内候補の予備選登録までのプロセス

5月中旬の党内予備選の登録締め切りまで、有力者の間で様々な駆け引きが展開された。5月2日には、馬総統の「意中の人物では」と指摘され続けてきた呉敦義副総統が、「自身は予備選には登録しない」と明言しながらも、「予備選ですんなり候補が決定せず、党から正式な徴召（招聘）があれば、総統選挙の出馬を考慮する」等の発言がなされた。

一方で、党内及び藍軍支持者の中で最も待望論が強かった朱立倫主席は、4月の時点でも否定的見解を説明していた。しかし、5月11日の台湾各紙は、馬総統が自ら、朱主席に対し二度も総統選挙への出馬を促していたと報じたほか、予備選でB級候補者が低支持率に終わり、党内規定をクリアできなかった際には、勝てる候補擁立のため、朱主席か王金平立法院長を樹立する動きがある等の報道がなされた。

5月上旬の時点で、有力者の一人である王院長は自身の立法院長再選も見据えた揺さぶりも兼ねてか、同人の言動が活発化し、一時は「出馬宣言も間近か」と連日報じられたが、5月15日に「個人の努力不足で支持者の期待に応えられなかった」と支持者に謝罪をする会見を行った。しかし、総統選挙不出馬に関しては明確に表明しなかったこともあり、党内予備選には登録しないが、洪副院長の支持率が振るわず、党内から強い候補を求める招聘メカニズム発動に備えた動きではないか、真の狙いは総統選出馬をちらつかせ、立法院長の再選を勝ち取る気ではないか等様々な憶測が流れた。翌16日には、朱主席が記者会見で自身の予備選不出馬と国民党候補が総統選挙で敗北した際には、責任をとり自身は党主席を辞任する意向を強調したことで、世論の関心は予備選出馬登記を済ませた洪、楊両名の動向に移った。

その後、国民党は数日間かけて、両候補の署名資料を精査した結果、楊候補の署名資料には不備があり、洪副院長だけが審査に合格した。その後、

5月31日に公認候補は、6月12-3日に行う世論調査で決定する旨説明がなされた。本来は、資格審査合格後には候補者間の政見討論会が予定されていたが、一人だけの候補になったため、党中央常務委員会での演説に変更された。

しかし、その後も党内で「B級人物」が候補になることで自身の再選にプラスにならないことを危惧する立法委員や、議会選挙敗北必至を憂う党関係者からは、明白に洪副院長に対して辞退を迫る有形無形の圧力を与えるなどの噂が連日メディアで報じられたほか、世論調査実施直前になって、洪副院長の支持率が党内規定に届かないことを半ば期待して、王院長が「党内メカニズムにより招聘されれば出馬を拒否せず」と発言したことなどが報じられた。

一方、洪副院長も自身に対する予備選出馬辞退を迫る党内の圧力の存在を認めながらも、「絶対に屈しない」と不退転の決意を示し、世論調査実施直前の10日には、中央常務委員会で政見を公表したほか、弱点と見なされていた外交、両岸については、元外交部長、元海基会秘書長など過去の閣僚経験メンバーから構成された「顧問団」を発表し、「対外政策も問題なくこなせる」と強くアピールしたほか、頻繁にメデイアに登場し、世論へ支持を訴え続けた。

2．国民党総統選挙党内予備選挙の結果

国民党の総統候補を選出する党内予備選は、6月12-13日の2日間、三社の世論調査機構「全国意向」、「典通」、「聯合報」を通じて実施し、14日に李四川秘書長が結果を公表した。

世論調査は洪副院長個人の支持度を問う（A）「個人支持率」、（B）蔡英文民進党主席との対決を想定した「対比支持率」をそれぞれ50％づつ加算した平均値で争われた。

李秘書長は、「世論調査機構3社による洪同志の平均支持率は46.203％となり、党の関連規定である30％の支持率を超えたため、党中央常務委員会での決議を経て、7月19日に開催される全国党代表大会で決議され、正式な公認候補に決定する」と報告した。

国民党の党内予備選における世論調査では、立法委員選挙の党内候補選出のプロセスでも弱い候補者が公認候補になるのを防ぐために支持率が30％を下回った場合は、仮に複数候補の争いで1位になっても公認候補には決定せず、他の「強い」候補を招聘できる規定があったが、今選挙の結果は個人支持率、対比支持率ともに約41％～53％と高支持を集めた。（表1）

李秘書長が世論調査の結果を公表後、洪副院長は党本部で記者会見を行い党内及び支持者に対して感謝の意を示すとともに、「この勝利は第一歩でしかない。世論調査の結果に耽溺せず、満足すべきでもない」として「更なる自信、意志、勇気を持って前に進まなければならない。二人の女の選挙は、台湾社会に全く新しい印象と感覚をもたらすであろう」と述べるところがあった。

調査結果を受けて、朱立倫主席と洪副院長は立法院で会談し、双方は「党中央とシンクタンクが全力で総統選挙における政見の論述に関してサ

表1　国民党の総統候補を選出する世論調査結果

		三社平均	全国意向	典通	聯合報
設問A	洪秀柱が国民党の代表として総統選挙に出馬することを支持するか否か。（個人支持率）	50.7％	52.67％	51.35％	48.27％
設問B	蔡英文と洪秀柱のどちらを総統に選びますか？（対比支持率）	41.6％	43.68％	40.64％	40.61％
合計	A50％＋B50％	46.2％			

ポートする」、「選挙対策チームを整合させる」、「党中央が総統選挙用の選挙対策事務所を提供し、全力で選挙をサポートする」の三項目につき合意したと説明した。

台湾の主要各紙は「2016年の女性総統は誰か」、「女性の戦い」などと、次期総統選挙では有力二政党が女性候補になる態勢が内定したことで、女性総統誕生への期待感が滲む見出しが躍った。その「女性の戦い」のもう片方の主役である蔡英文主席は、イベント出席の際にメデイアに対し、「洪秀柱副院長がスムーズに党公認候補に選出されれば、ともに新しい選挙文化を創造したい。過去に多く見られた、相手への罵倒、でっち上げ、レッテル貼りなどの不当な選挙活動を行わない。今回の選挙は『二人の女の戦いではない』」と示すとともに、「一緒に選挙の気風を浄化し、選挙権を含む公民権の18歳への引き下げの憲法修正を推進しよう」と呼びかけるところがあった。

藍軍系メデイアでは洪副院長に対する祝福の声が圧倒する中、国民党政権に厳しい立場で臨む『自由時報』紙は、今回の予備選のプロセスや結果につき噴出した国民党内部の複雑な党内事情を反映した見方、国民党、民進党双方の陣営から提起された世論調査の信用性などにつき紹介している。

朱立倫主席派の寥正井立法委員は、「現在の馬政権に対する世論の評価は厳しいものがある。蔡英文はすでに3年も総統選挙に向けた準備をしているところ、洪副院長は時間的にも厳しい。現内閣も選挙を見据えた選挙内閣に改組し、早急に選挙に向けて動き出す必要がある」と強調した。一方、匿名の王金平派の立法委員は、「洪副院長のイデオロギーはあまりにも統一派に偏っており、彼女の公認候補選出は中南部地域の立法委員にとっては全くプラスにならない。本土色の強い中南部の選挙は大苦戦必至である」と憂慮する声を紹介した。

また世論調査に対するルールの設定と調査結果に対する信用性への疑義も提出された。国民党中央常務委員の李柏融は、「今回の調査結果は嘘っぽい、民進党支持者の多くが（汲みしやすい）洪副院長の選出を願って、本音ではない『洪秀柱支持』と回答していた者が相等いたはずである。また従来の党内の世論調査のルールであった対比支持度85％＋個人支持度15％を、誰かが勝手に洪副院長に対して有利なように50％＋50％に変更した」と不満を漏らした。

民進党陣営からは、陳其邁立法委員が、「洪副院長が個人支持率で三社とも軒並み40％を超える高支持率を獲得した。一方で『慣例に基づき』との理由で、国民党は相手候補（蔡英文）の支持率を公表しなかったが、同様の世論調査では通常、無回答者、回答拒否者が2－3割くらいは占めるはずだが、今調査における洪副院長の支持率は異常な高さであり、調査の信用性を失っている」と調査自体に疑義を呈した。

洪副院長の副総統候補の人選としては、「男性」ということでは、かなりの合意があるようだが、国民党関係者によると洪副院長と以前相談したところでは、「行政経歴が豊富で、財政と経済に明るい党内同志」、「党外に優秀な人材を求めることも反対せず、勝利を前提に思考」の二つの方向があると示唆した。洪副院長本人は、副総統候補の主要条件として「理念の一致」、男性、自分より少し若い、地域バランスを考えて中南部出身、省籍問題については注意が必要とし、自身が外省人に分類されていることを意識してか（父外省系、母本省系）本省人など、相互補完できる人材の登用を示唆した。

表2は現段階の両候補の背景、経歴、政治的主張等の比較である。現段階で政策面の主張で最も際立つ違いは、両岸政策の立場の違いを指摘できる。蔡英文が、台湾独立を選択肢として残しながらも、公には中道路線を歩み、一貫して現状維持を主張しているのに対し、洪秀柱は自身の両岸政

表２　洪秀柱副院長と蔡英文主席の経歴、政見比較

	洪秀柱（国民党）	蔡英文（民進党）
年齢、婚姻	67 歳　未婚	58 歳　未婚
学歴	米ミズリー州立東北大修士	英ロンドン政経学院博士
政党経歴	副主席、代理秘書長	主席
政治経歴	立法委員、立法院副院長	行政院副院長、大陸委員会主任委員、立法委員
両岸関係	一つの中国を同時表明（一中同表）台湾独立反対、両岸平和協定締結を推進	両岸現状の維持 中華民国現行の憲政体制下で両岸関係の平和的発展を推進
原発政策	エネルギー供給の安全を前提とした上での原発依頼度を下げる	省エネ計画を推進、2025 年に非核国家を目標
労働者の権利	労働時間短縮、最低賃金引き上げと毎年の基本給検討、派遣社員の２年内の正職員化	基本賃金法制定、立法により派遣社員の権益を管理する
死刑廃止	死刑廃止に反対	社会の一定のコンセンサス必要
性の多元性	愛するもの同士が法律の保護を受けることを支持。（同性愛へ理解）	台湾社会がこの方向に進むことを希望する。
憲法修正	18 歳公民権付与　行政院長の立法院における同意人事復活	18 歳公民権付与など与野党で合意ある件につき先に修正する二段階修正案を主張

資料元：「洪秀柱 VS. 蔡英文」、『聯合報』（2015 年 6 月 15 日）頁 3、「柱姉 VS 小英」、『自由時報』（2015 年 6 月 15 日）頁 4。

策に関して、明確に台湾独立を否定し、「一つの中国を同時に表明する」、政治対話を通じた両岸平和協定の締結を掲げるなど、過去の総統候補と比べて急進的統一派の立場に近い言動が際立っている。

しかしながら、支持基盤の脆弱な洪副院長が自身の支持率を上げるために、党内の基本教義派が好む主張をし、保守層の「深藍」（急進統一派）の支持を固めてから、選挙戦が進む段階で、その主張をより現実的な中道（現実）路線に修正する手法をとることはある程度理に適っており、選挙が進む段階で適宜修正されていくものと筆者は考えている。

国民党の党内予備戦直後に発行された『新新聞』は、洪秀柱の選出をテーマに特集を組んだが、国民党内の権力闘争がからんだ内幕を多方面から論じている。

コラムニストの顧爾德は、今選挙での最大の勝利者は洪副院長であったとしつつ、最大の敗者は、馬総統に徹底的に妨害され、屈辱的に予備選の出馬を断念せざるを得なかった王金平であったと指摘し、74 歳という年齢的にも最後の機会を逸したと論じた。また朱立倫主席も、党内予備選期間中に指導力を発揮できず、政治家に必要な「決断力に欠ける人物」というイメージが印象付けられ、王に劣らない敗者であると論じた。また馬総統に関しては、一番憎い王金平を抑え込み、朱主席の台頭を防ぐことに成功し、馬（自分）を頼りにせざるを得ない洪副院長が選出されたことは、2016 年の総統退任まで自身のレームダック化を回避できる見通しがついたことで勝者になったと論じた。

他のコラムでも、朱主席が、今回の総統選挙は勝ち目がないことを悟り出馬しない一方で、王金平に負け戦をさせつつ、選挙の重点を議会選挙に絞り、立法院で国民党が過半数議席を制すること

で、馬、王、呉敦義といった旧世代の政治家を政治舞台から追い出し、自身は党主席の留任に成功し、党の救世主として次世代を担う真のリーダーとして君臨する狙いであったが、馬が王の出馬を妨害しただけでなく、コントロールの利かない洪副院長が総統候補に選出されたことで、その目算が大きく狂うことになったとの指摘もされた。

予備選勝利後の洪副院長は、自身の訪米について消極的な姿勢を示したことや朱主席や王院長に対する軽薄な発言が党中央常務委員会で槍玉にあがったほか、同女史が対外的に示している米国教育学修士学歴の詐称疑惑が指摘されるなど、国民党内はまだ一致団結して洪女史を推そうという雰囲気にはなっておらず、7月19日の全国党代表大会まで予断を許さない状況である。

3．国民党、民進党両陣営の候補内定後の世論調査

国民党の党内予備選から、4日後に『TVBS』が公表した支持率調査の結果は、洪副院長41%、蔡英文38%と逆転する結果となった。無所属候補として出馬表明している施明徳元民進党主席は2%にとどまっている。

ご祝儀相場とはいえ、予備選2ヶ月前の段階で『聯合報』が行った調査では、洪副院長は国民党内でも4番目の位置、蔡VS洪の対比では60%対12%と大差がついていたのが、調査機関と調査方法が異なるとはいえ、驚くべき結果となった。

政党支持傾向でも洪、蔡両候補とも自党の支持層は8割近く固めた一方で、政党支持の弱い、中立有権者が3割以上も支持する候補を決めていないところ、今後はこれらの層の取り込みが勝負の分かれ目となるであろう。

一方で、民進党に近い機関の「両岸政策協会」が実施した支持率調査では、蔡英文50% VS洪秀柱29%と蔡主席が大幅リードする結果が出たのに続き、『聯合報』が6月29日に公表した世論調査の結果は、支持率で蔡英文45%、洪秀柱33%、看好度（有力度）は蔡53%、洪13%と蔡英文が大きくリードするなど、台湾住民の過半数以上が蔡英文が勝利すると見なしている結果となった。筆者の感覚としては、直後の『TVBS』の調査よりも『聯合報』調査の方が「民意」を反映した数字ではないかという感じがするのは、主観的な見方であろうか。

二、次期総統選挙第三候補の動向

国民党の候補者選びが佳境を迎えていた5月20日、施明徳民進党元主席が正式に次期総統選挙への出馬を表明した。同人の主張は、国民党、民進党ともに台湾社会が真に求めているものを体現できていないとし、与野党をともに批判することを基調としつつ、現段階で優位な地位に立つ蔡主席を批判の焦点に絞り、民進党の主張は大企業、

表3　総統有力候補の支持率と支持政党傾向

	全体	支持政党の傾向			
		民進党	国民党	中立	その他
	100%	25%	28%	34%	13%
洪秀柱（国）	41	9	77	34	39
蔡英文（民）	38	81	10	30	40
施明徳（無）	2	0	2	2	1
未決定	20	10	11	34	20

資料元：「民調洪秀柱支持度首贏蔡英文3個百分點」、『TVBS』（2025年6月17日）
http://news.tvbs.com.tw/politics/news-603644/

表４　2016 年総統選挙情勢の支持度と有力度

	支持度	有力度
蔡英文	45%	53%
洪秀柱	33%	13%
無意見/無回答	23%	34%

資料元：「2016 雙雌爭霸 本報新民調 蔡英文 45%贏洪秀柱 33%」『聯合報』（2015 年 6 月 29 日）頁１。

富裕層に媚びていると批判するとともに、藍緑といった既存の政治的枠組みを超えた大連合政府の形成により、台湾社会の和解を促進させることが唯一の選択肢であると強調した。また両岸関係においては、「大きな一つの中国の枠組みが一つの中国原則に取って代わる」（以大一中架構取代一中原則）原則を主張したほか、内政面では、二年以内に住民投票を実施して、大統領制から内閣制への移行を主張した。

同人は、2006 年に陳水扁前総統の親族のスキャンダルが発覚後、陳水扁の辞任を求める大規模な抗議活動を成功させるなど、未だに台湾社会で一定の影響力を有しており、仮に与野党の対立が選挙を控えて先鋭化、激化し、国政も更に空転した場合、昨年のひまわり運動のような、国民党でもない、民進党でもない人々の支持を集め、総統選挙でキャスティングボートを握る可能性も指摘されている。

また前回 2012 年の総統選挙では、国民党との協力関係が破綻し、親民党の存続を賭けて総統選挙に出馬した宋楚瑜親民党主席も同党秘書長ら周辺の関係者が、次期総統選挙出馬の可能性を匂わす発言を繰り返し行っている。一部の藍軍支持者や中間層には「洪副院長では戦えない」とし、宋氏の出馬に期待する声があるのも事実である。

台湾の関連規定では、無所属候補が総統選挙に出馬するには、有権者の 1.5%の署名が必要であり、2012 年の有権者数にあてはめると約 27 万人分の署名が必要となる。2012 年の総統選挙に無所属で出馬した宋楚瑜主席は 46 万人以上の署名を集めている。

三、蔡英文民進党主席の訪米

蔡英文主席率いる民進党代表団一行は 5 月 29 日から 6 月 9 日まで 12 日間の米国訪問を行った。米国滞在中、ワシントンではアントニー・J・ブリンケン国務副長官と非公式会談を行うなどハイレベル交流のほか、各地で華僑団体との懇親会、シンクタンク及び大学での講演、企業視察などを行った。

台湾の総統候補は選挙の前年に訪米する機会が多い。2007 年には民進党では謝長廷が、2011 年にも蔡英文が訪問している。馬総統も台北市長と党主席を兼務し、総統候補になることが有力視されていた 2006 年に訪米している。

蔡主席の訪米の目的は、台湾系華僑への支持の訴え（彼らの多くが選挙のために一時帰国する）や政治資金集めといった内政的考慮のほか、実質上の同盟国である米国に対し、米に対する「顔見せ」を行い、自身が米にとって信頼たる人物であることを訴え、認識してもらい、緊密な米台関係の継続の強調をすることにある。特に民進党は、陳水扁政権時代に対米関係が悪化し、修復に多大な苦労を強いられた失敗を繰り返さないためにも、党是である台湾独立を放棄することはできないが、中国との間では対立を引き起こすような挑発的行為はとらず、両岸関係の平和と発展を主張したようである。

米国への出発に際し、蔡主席は桃園空港で記者会見を開き今回の訪米の目的は二つあるとして、一つ目は、「米国各界関係者との意見交換、同時に米台関係の深化を促進させる。特にアジア太平洋の安保問題、米台貿易問題に関する意見交換を希望する」。

二つ目は、「ハイテク産業、サービス業関連の企業を訪問するほか、科学技術関連のフォーラムにも出席し、新興産業、物流網などの新しい分野の

産業形態を視察し、台湾の産業が新たな契機を見つける機会としたい」と強調した。

米国滞在では、６都市を訪問し、以下の日程をこなした。

５月30日　ロサンジェルス：
台湾出身華人系下院議員との朝食会、米学者との座談会、華人団体による歓迎宴

５月31日-６月１日　シカゴ：
華人団体による晩餐会、ノーベル経済賞学者James Heckman表敬

６月２-５日　ワシントンDC：
民進党駐米代表処視察、メディアとの対話、シンクタンクでの講演、米国会議員による歓迎カクテルパーティー、U.S Taiwan Business Council主催の昼食会、元国務省高官表敬、華人団体の歓迎会、メデイアとの茶話会、国務副長官と非公式会談

６月５日　ニューヨーク：
華人団体による歓迎宴と講演

６月６日　ヒューストン：
華人団体による晩餐会

６月７-８日　サンフランシスコ：
企業訪問、科学技術フォーラム出席、メディアとの茶話会、華人団体での講演

６月９日　台湾帰国：
台湾メディアに対する訪米成果の説明

９日、帰国の途に着いた際、蔡主席は桃園空港で簡単な記者会見を行い訪米を総括した。蔡主席は、「今訪米の12日間、米国の行政、立法部門及び産業界、シンクタンクと幅広い分野での意見交換を行い、全ての行程の内容が豊富で多元的なものであり、また同時に米国の台湾に対する善意を感じることができた」と述べた。

次に、今回の訪米で米国に伝えた最も重要なのは、「台湾人民は民主、自由を堅持する。同時に我々は両岸関係の安定を維持し、そのための強い決意を持っていることである」と強調した。

最後に、今回のスケジュールは概ねスムーズに展開し、当初設定していた目標を達成することができたと述べ、最後に今回の行程をアレンジした米国政府及び在米国台湾人関係者の支持と関心に感謝の意を表明し、記者会見を終えた。

今回の訪米では、米国側の丁重な対応と台湾を重視する姿勢は、現役の国務副長官が次期総統の有力候補とはいえ野党の代表と会見したことからも見て取れる。また、米国各地で華人団体を中心とした支持者との交流会では熱烈に歓迎されたことが各種報道から伺い知ることができ、今回の訪米が「順調」であり、総統選挙に向けた大きな関門をまた一つクリアしたことを感じさせられた外遊であった。

コ　ラ　ム

着任９ヶ月、台風による「停班停課」を初めて経験しました。

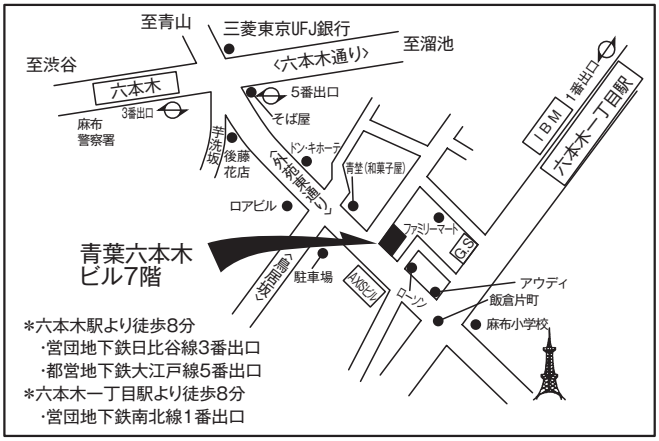
数日前から９、10、11号の３つの台風が近づいていて話題にはなっていたのですが、前日も台北はいいお天気で「まさか休みにはなんないよね～」と同僚と笑って話していたところ、夜10時過ぎ、まさかの発表。当日のテレビは「台北市民は朝から映画館に行列」、「休日とならなかった宜蘭の市民が不満たらたら」といったニュースが流れていて、なんだか台風休暇ってたまにやって来るお祭りみたい！？　日中は市内の雨風もそこまでひどくなく、日本人的には「こんなんで休んじゃっていいのかな」とちょっとだけうしろめたく思いつつも、のんびりと過ごしました。

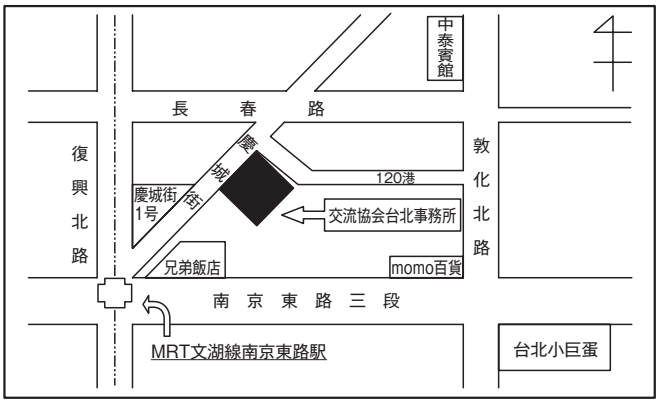
台風が多い台湾では、台風休暇の発令は被害を最小限にするための「転ばぬ先の杖」なのでしょう。これから夏本番、台風も次々やってきて、またたまに「停班停課」もあるかな～と期待、いえ心配しながら、引き続き日々の業務に勤しみたいと思います。

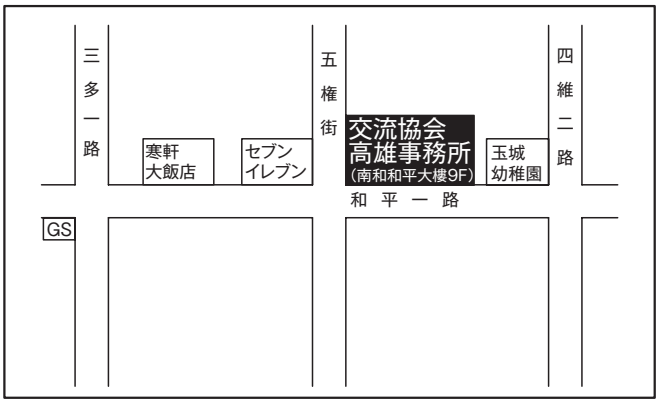
（台北事務所　塩澤雅代）

交 流　2015年７月　*vol.892*

平成27年７月24日　発　行
編集・発行人　舟町仁志
発　行　所　　郵便番号　106－0032
東京都港区六本木３丁目16番33号
青葉六本木ビル７階
公益財団法人　交流協会　総務部
電　話（03）5573－2600
ＦＡＸ（03）5573－2601
ＵＲＬ http://www.koryu.or.jp
表紙デザイン：株式会社　丸井工文社
印　刷　所：株式会社　丸井工文社







台北事務所　台北市慶城街28號　通泰大樓
Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st.,Taipei
電　話（886）2－2713－8000
ＦＡＸ（886）2－2713－8787
URL http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3 contents.nsf/Top

高雄事務所　高雄市苓雅区和平一路87号
南和和平大樓９Ｆ
9F, 87 Hoping 1st. Rd.,Lingya Qu,kaohsiung Taiwan
電　話（886）7－771－4008（代）
ＦＡＸ（886）2－771－2734
URL http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3. contents.nsf/Top

日本と台湾との架け橋

公益財団法人

交流協会

Interchange Association,Japan(IAJ)